若葉台もみじシュガーズ

設立年月／1992年５月　　連絡先／部長　佐藤　亘　TEL. 92*-***3

http://www4.plala.or.jp/MONTA/suga_n_f/

「おい佐藤、話が有るんだ。放課後、ちょっと階段の下まで来てくれ。」

安部は新米部員の亘にちょっと、つっけんどんに言いつけた。「おお、柳田も一緒にな。」

亘の背筋に一瞬電気が走った。この先輩にだけは逆らえない。安部は、ぼそっとした言い方に、頼りなげな表情なのだが、逆らうことを許さない雰囲気を漂わせていた。

「はい、判りました。」こう答えるだけで、亘の背中に冷たい汗が一筋落ちた。一体俺が何をしたと言うのだ。入部以来、それなりに馴染む様に努力もしたし、プレーも頑張って来たと言うのに。その後の授業は、もうほとんど耳に入っていなかった。数学の森川など机の前に来て「おい、少しおかしいぞ。廻りの馬鹿に合わせなくてもいいんだぞ。」なんておだてに掛かってくれる。何時もよりやさしくされるくらい、亘は変だったのだろうか。

だみ声の安部がいきなり、切り出した。

「おお、佐藤、よく来た。部長をやってくれ。柳田、お前は主将だ。いいな。」

「部長、いきなり何を言ってんですか。」

「いきなりじゃない。考えた結果だ。俺たちは出ると負けの新興チームだ。しかし、それなりの良さは有る。甘いと言われるが自由を重んじてやってきた。その自由を判る為に雑用をやれ。それが部長と主将だ。他の皆も一度は何かの役をやってきたんだよ。」

安部は、それだけ言うと二人の前からいきなり去ってしまった。校舎の影で一度振り向くと「頼むぞ。」と低い声で言いながら、無粋な顔でウィンクして消えた。

役付きになってしまった亘と柳田は、まずチーム把握の為に、太古から生息してる様な高橋や窪田・小渕・川辺にチーム事情を聴いてみた。それによるとチームは、９２年５月に男女 30 人程度で、前年の委員（自治会結成初年度の役員）の同窓会の様な形で作られ、名前の「シュガーズ」は、もみじの赤い葉からメープルシュガーとも、練習の強制無し・来る者去る者拒まず・プレーも自由の甘さとも、初代部長の苗字からともトンでも無い話が出てきた。そんなんなら、「キャンディーズ」の方が可愛いじゃん。しかし、話一つ聞くにも飲まないと聞けないこのチームは「バッカス」か。飲めない人が一人二人去り、いつのまにかのんべだけになってしまったんじゃないの？。野球の経験者も二人しか無く、よくやっているよな。転居者・退部者もかなりいる。佐藤・石山・大塚・荻原・川畑・荒木・香取・大曽根・田中・木所・平田・山田の皆さんがＯＢとなっているらしい。

練習は、あまりやらないし、打てないし、投げれば四球だし、勝てなくても気持ち良く飲んでいる。これはなんとかしよう。練習不足は杯片手に、イメージトレーニングに励み、花見、祭の模擬店、バーベキュー、忘年会は言うに及ばず、自治会の炊き出しの係、キックベース、駅伝、インディアカ、運動会、何でも来いの精神で頑張ってきた。新入部員も大関・平田・阿

〔後列左より〕
〔前列左より〕

部と続々入ってきた。

その甲斐有ってか、今日はついに浜横県の準決勝だ。これに勝てば関東大会への出場・甲子園が見えてくる。

さて回は最終回の裏、点差は４－１０。６点差のビハインドを３番平田から打者一巡、二死ながら二番亘のセンター前安打で同点までこぎつけた。もう一点。亘は賭けに出た。次は３番４番だ。一打で決めてもらおう。次の投球時もう足は止まらなかった。二塁ベース前でスライディング。相手二塁手のグラブがスローモーションの様に目の前に迫ってきた。ゴォーン。

「佐藤さん、大丈夫？」菅原さんが佐藤の顔を心配そうに覗き込んでいる。他にも磯本、堀内、松浦、田矢の面々。あれ、おじさんばっかだなあ。

「こっ甲子園・関東大会はどうなりました。」

「なに寝ぼけてるの。ここはおじさん若者混合リーグ若葉台でっせ。やっと初の勝率５割が見えてきたところよ。」

シュガーズは、管理組合理事長を４名、自治会事務局長を５名輩出してきた、地域に根ざしたソフトボールチームです。今後とも甘いチームをよろしくお願いします。